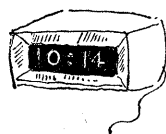


★海外文献紹介★

国際児童教育連盟と  
その機関誌について



米国の国際児童教育連盟（ACEI）の雑誌「Childhood Education」の論文のいくつかは、本誌のこの欄で今までもときどき紹介されてきたが、雑誌自体の紹介やその母体であるACEIの紹介が、本誌でも、また保育史（特に米国に関する）の書物でも充分なされていないので、今回、この欄を借りて米国の「保育会」の代表ともいえるべきACEIとその機関誌の歴史を簡単に紹介してみようと思う。

ACEIの前身、IKUの結成

「一八九二年（明治二十五年）七月半ばには、こんな事件が相次いだ。イギリスのグラッドストーンが謹少差で第三次内閣を組閣する。議会では、日曜日も開催するというシカゴのコロンビア博覧会に、適当な財政援助を与えるべきか否かについて激しい論争がつづく。エトナ山（シシリア島）は、四度目の噴火をはじめ、連邦軍に、西部の「カウボーイたちを脅かすもの」を一掃するよう命令が下る。大衆の注意がこのような事件にくぎづけにされているとき、ささやかな教師の集まりが、サラトガ・スプリングス（ニューヨーク州）のバプテスタ教会でもたれていた。人々は、あまり他の事がらに心をうばわれていたので、この小さな教師

の集まりに注意を向ける者はいなかった。しかし、彼らがそのさ  
さやかな会合でなしとげたことは、次第に人々の関心を引きつけ  
るものであった。彼らは、幼稚園（普及）運動の国際的組織を結  
成し、「万国幼稚園連盟（IKU）」と名づけたのであった。……」  
IKU（ACEIの前身）の五十年史のパンフレットは、このよ  
うな書き出しではじまる。十九世紀も最後の十年に入る頃、米國  
の幼稚園史は三十六年目を迎え、量、質ともにひとつのピークに  
達していた。量の面では、幼稚園数は公私合わせて二千を越え、  
当時幼稚園を学校教育の一部として法的に認める州は半ダースに  
も足らなかったが、それでも、大都市を中心に公立幼稚園の数を  
着々と増加させていた。また質の面では、保育原理としてのフ  
レーベル思想は完成度を極めていた。シュルツ夫人によって、初  
めてこの思想の種子がまかれて以来、ピーボディ夫人の精力的な  
活動によって、全米各地に根分けされ、三十余年の間に各地の幼  
稚園協会の中で、この思想はすくすくと育っていた。各地の幼稚  
園協会の主な任務は、教員養成の仕事であったから、保育者にな  
るといふことは、取りも直さずフリーベル思想の洗礼を受けるこ  
とを意味していた。一八九〇年頃までに、米國の幼稚園は、その  
独自の思想によって固有の世界を形成し、それを忠実に守る保育  
者によって、数を増大させ教育機関としての市民権を獲得するま

でに到ったのである。ところが、一たび幼稚園が教育界の一角に  
その地位を確保するや否や、既成の学校教育との関連性を迫ら  
れ、その固有の保育原理からむしろ脱皮することが、新しい教育  
体系の中で生き延びる必須の条件となっていたことは、誠に皮  
肉な結果といわなければならぬ。すつかり根を張ったフリーベ  
ル主義からの脱皮は、決して容易なことではなかった。脱皮への  
圧力は、一八八四年（明治十七年）、全米教育協会（NEA）の  
中に幼稚園部が作られた後、一層公然化し、やがて幼稚園界の指  
導は、保守派と革新派とに分かれて、相争うようになっていっ  
た。このような内部対立は、現場の保育者、あるいはこれから保  
育者になろうとする人々を混乱に陥れ、「一体誰のいうことが正  
しいのか？」（Who is right?）と、う動揺をおこしたのであっ  
た。

IKU結成前夜の幼児教育界は、再生の途を求める立場の違い  
が露呈し、現場に混乱の兆しの見えはじめた時期ということがで  
きる。IKUは、このような新旧対立の時期に「すでに存在する  
さまざまな立場の幼稚園運動をひとつの流れに結集」して、新し  
い時代の保育原理を模索し、それによって一層幼稚園運動を盛り  
あげる目的で結成されたのである。

こうして一八九二年七月十五日、サラトガ・スプリングスでお

こなわれたNEAの年次総会の席で、幼稚園部とは親密な関連を保ちながら、幼稚園部以上の活動を展開するために、各地の幼稚園協会の代表者、養成担当者らによってIKUが結成された。三年後には、NEAからも独立し、結成十年目の一九〇二年（明治三十五年）には七千人の会員を擁する団体に成長していった。その後、一九二〇年代の終りまで、IKUは米国における唯一の保育専門家集団として、またその後も幼稚園教育の普及、充実、発展のために主導的な役割を果たしていくのである。

## IKUの業績

IKUの第一の業績としてとりあげられるものに、有名な十九人委員会の設置がある。これは、幼稚園関係者の間にある意見の対立を調整するために、保守派、革新派さらに中間派の代表者計十九名をIKUが召集し、充分時間をかけ、論議をつくして各派の保育実践の方法や教員養成の仕方の特徴を明らかにする機会を作り、それによって新時代の保育原理をうちたてようとする野心的な企画であった。保守派部会の委員長にはスーザン・ブロー、革新派はパティ・ヒル、そして中間派はエリザベス・ハリソンがそれぞれ任命され、当代随一の幼稚園界の指導者が三つの部会に

分かれ、六年の歳月をかけて討論をくり返し、一九一〇年（明治四十三年）に三部から成る「幼稚園——幼稚園の理論と実践についての十九人委員会の報告書」を出版したのである。三つの立場は、最後まで独立性を守り、その違いも尊重されたが、最終的には「共に力を合わせ、幼児教育における最新の研究を活用することを確認した」ため、保守派が後退し、革新派の考え方が新時代の主流を占めていったことは、よく知られている通りである。結果はともあれ、二十年にわたる新旧交代の抗争を、保育者自身の手でオープンにまた論理的に終えることができたのは、主催者IKUの忍耐強い、公正な支援に負うところが大きかったといえよう。固有のものを保持しようとする立場と、新しい状況の中で転換をはかろうとする立場の葛藤は、その後も教育の歴史の中でくり返し出現するが、IKUはその度に、二者択一よりは「より大きな総合に向かつて」葛藤の解決にあたっていくのである。

IKUは、対外的にも極めて積極的に活動を展開し、一九二二年（大正元年）の連邦教育局幼稚園課設立にあたっては、IKUからスタッフをサラー、持ち、派遣してこれを援助し、その後も行政決定に大きな影響を与えていく。また、IKUは結成当初から、世界の保育者と連帯して幼稚園運動をおしすすめることを目的としてきたので、第一次大戦時には、大戦下のフランスの児童

の救済に大きな貢献を果たした。

### 機関紙“Childhood Education”の発刊

このように内外での活躍がつづく中で、一九二四年（大正十三年）はじめて本部をワシントンに設け、待望の機関紙を発行するのである。すでに会員数は二万人を越え、著名な幼児教育者や研究者のすべてを会員に登録していたのであるから、機関誌「Childhood Education」は、まさに富貴の家に誕生したということができる。「Childhood Education」の最初の編集委員として名を連ねた人々は、ウィリアム・キルパトリック、パティ・ヒル、ルーシー・ウィーロック（十九人委員会初代委員長）、エラ・ドウブ（全国小学校教育会議会長）、アーノルド・ゲゼル……等々、「まるで教育界の名士録のようであった」と、オズボーンは雑誌五十周年記念の祝詞の中で述べている。確かに、雑誌「Childhood Education」は、恵まれた出発をした。しかし出発と同時に、IKUは新たな試練に直面しなければならなかった。幼児教育界は、またもや一つの時代を終えて新しい再編成に向かって歩みはじめる時期を迎えていたからである。

### NANEと機関紙“Young Children”

一九二〇年代の幼児教育界の新しい動きは、ナースリー・スクール運動である。一九二〇年代のはじめ、ロックフェラー財団の援助で、各地の大学や研究所に実験的教育や、ある方法のデモンストレーションのため、あるいは他の研究の目的のために、多数のナースリー・スクールが設置された。これらの大学のナースリーで、幼稚園以下の年齢の子どもの潜在力についての研究がすみ、また彼らの指導の方法が開発されると、研究者や教育者は先を競ってナースリー・スクールを組織し、実際にははじめること、今度はプログラムの問い合わせが殺到したということである。二〇年代のはじめには、その数はたった三つであったものが、二〇年代の終りには、百六十二に急増した事実からも、この十年間のナースリー・スクール運動の高まりをうかがい知ることができる。

ナースリー・スクールが増加すると、関係者は独自の専門家集団を組織することを求めるようになってきた。一九二五年（大正十四年）、初めてナースリー関係者がニューヨークで会合をもち、パティ・ヒルを会長として選出し、組織独立の是非について話し合いをおこなった。IKU内部でもこのような動きに対応して、

ナーズリー・スクールに関する三つの委員会を発足させ、一九二七年（昭和二年）には「ナーズリー・スクールの新しい組織は現時点では必要としない。ナーズリー関係者は、既存の組織のナーズリー部門に所属すべきである」という見解を明らかにした。こうした決定に大きな役割を果たしたのは、当時 I K U 会長に就任したアリス・テンブルであった。彼女は、ナーズリー・スクールの他に、小学校教育の団体とも連携して、幼児から児童までの教師集団として、I K U の組織を拡大する考えをもっていたからである。ところがナーズリー関係者は、ナーズリー教育の独自性を主張し、また当時盛んになってきた児童研究の教育への積極的な応用を主張して、「一九二九年（昭和四年）、各地のすぐれた大学ナーズリーの研究者——心理学者、医師、看護婦、ソーシヤル・ワーカー、そして教師——を中心とする新しい組織、全米ナーズリー教育協会（N A N E）を結成したのである。この新しい組織の誕生は、ナーズリー・スクールから小学校までの一貫教育を夢みていたアリス・テンブルにとって大きな痛手であった。とりわけ、新しい組織の産婆役が、革新派の同志として新時代の幼児教育の軌道作りをしてきたパティ・ヒルであったことは、アリス・テンブルを一層悲しみの底に陥れたと関係者は伝えている。一方、パティ・ヒルの心の中には、一八九五年の夏の日の興奮——

スタンレー・ホールによって児童研究の豊饒な可能性を知らされた——がうずまいていたのかもしれないが、教育界の新参者ナーズリー・スクールの弁護のために、かつての彼女の挑戦者スーザン・プロウのように、ナーズリー教育の固有性を主張する側にまわることは、皮肉な巡り合わせである。かくして幼児教育界は、現職教員を中心とする I K U と研究者の比率の高い N A N E の二つの組織をもって、一九三〇年代を迎えるのである。

一九三〇年代、四〇年代は、幼き者の教育が発展するには、あまりにも沢山の障害がありすぎた。一九二九年の秋には、商工業のなか景気にわきたっていたその最中に、未曾有の経済恐慌が発生し、三〇年代全般にその影響が拡がり、ようやく脱出したかに見えた四〇年代の初めには、第二次大戦に突入していた。この間、保育者は二重の責務——子どもたちおよび彼等の家庭の保護と保育者自身あるいは彼らの家庭の維持——を負ってこれらの艱難に立ち向かわなければならなかった。二つの組織は、この困難な時代を切り抜けるために協力して「緊急保育学校プログラム」「戦時保育所プログラム」の設立、展開に奔走するが、次第に組織の小さな N A N E の勢力は衰えていくのであった。

N A N E は、組織結成直後に経済恐慌という不測の事態に見舞われたため、会員の多くを占める大学ナーズリーのスタッフは資

金難から失業し、新しい児童研究もただえてしまい、本来の活動ができなくなってしまったのである。恐慌中は、児童の福祉に重点をおく団体に衣更えし、ようやく活躍の場所を見出すが、大戦中は、一時会員が百人を割るところまでおちこみ、戦後も五〇年代まで会の維持のために苦闘の日々をつづけなければならなかった。このような最悪の事態で組織を維持できたのは、会員に向けて定期的に発行していた会報の力にあずかっていたという。そして、この小さな会報こそ、雑誌「Young Children」の前身の姿であったのである。その後、NANEは、あのマンモス・プロジェクト、ヘッド・スタートによって再生し、一九六六年には全国幼年教育協会(NAEYC)と名称を変更し、六九年にはワシントンに本部を設立して急速に会員を伸ばし、今日に到っている。

## ACEIの成立

一方、IKUは、一九三一年(昭和六年)全国小学校教育会議(NCPE)と合併して児童教育協会(ACE)という組織に再生して、一大職能団体として戦前の二十年、戦後の十年の苦しい時代を、子どもとその家族、そして保育者の福祉と教育の守護者の役割を果たし、戦後は国際(International)という言葉を再び

附加して現在のACEIと改称し、世界的な専門家集団に成長していったのである。機関誌「Childhood Education」は、毎号「固定したやり方を支持するのではなく、考えることに刺激を与えるために」(To Stimulate Thinking Rather than Advocate Fixed Practices)というモットーを掲げ、そのモットーにふさわしい態度で子どもの福祉・教育の発展にかかわる基本的な課題を忍耐強く追求していることは、多くの読者の認めるところである。教育実験の六〇年代を終えた今日、次のような古い課題を、新しい研究や理論の成果をふまえてとらえ直す作業をはじめていることは注目に値するといえよう。

- 好奇心を育てる
- 児童の尊厳を守る
- 人間性を涵養する

保育者であれば、一日のどこかでこうした問題のいずれかにとり組み、解答を見出す努力を行なっているはずである。毎日の保育の充実につながるこうした課題の解決に、私たちはどのような知識を使うことができるだろうか。ACEIの最近の論文は、こうした疑問に「刺激」を与えるものと思われるので、次号からその紹介を再開する次第である。

(大戸美也子)